

西トップ遺跡の保存と修復

解体修復の経緯 西トップ遺跡南祠堂の解体は、2012年3月8日の開始式典を受けて同月9日から開始し、同年8月までに躯体部の解体を終了した。その後、上成基壇の解体をおこない、下成基壇は上面敷石N18から始め、下成基壇の地上部分N22の解体を2013年8月に終了した。その後、一時解体作業を中断し、基壇土の調査や、発見された基壇内石列の調査をおこなった。基壇内石列などの調査概要は、紀要 2014を参照されたい（『紀要 2014』）。

南祠堂基壇再構築の方針 南祠堂は大きく躯体部と基壇部に分かれ、基壇部はさらに上成基壇と下成基壇とに分かれる。再構築にあたって、まず下成基壇の構成と再構築の方針を決めることが求められた。また再構築にあたっては2014年6月のアンコール遺跡国際調整委員会技術委員会（ITCC）で受けた提言にも配慮する必要がある。

まず大まかな再構築方針としては、これまでも現地の様々な修復にあたって遵守された基準が優先と考えら

れ、オリジナルの石材を原則使用し、オリジナルの位置に戻すことを原則的な目標とした。

ただしそこには遺跡の環境や状態などの様々な要因が加わり、必ずしもこの原則を遵守できない場合も生じる。現地の施工管理者と幾度かの合議を経て、西トップ遺跡南祠堂再構築にあたっての方針として、下記のような内容を考えた。

まず下成基壇については、地上部分のN18からN22まで、地下部分N23からN25まで、掘込地業部分に3つに分け、それぞれに方針を考えた。

まず掘込地業部分は、基壇内石列までを検出し、それ以上は掘り進めないこととした。掘込地業を掘り下げて改良土でより強固にすることも考えられたが、基壇内石列をオリジナルな状態で残すことを優先したのと、現状で掘込地業下半部が、簡易貫入試験の結果をもとにしたN値の推定値で、10～13と比較的しっかりしていたことによる。

N24とN25はほとんどラテライトで構成されており、地中に埋設されていた環境のために、ラテライトの劣化



図31 下成基壇再構築の様子（南から：2015年3月19日撮影）

